千葉県教育振興財団調査報告第625集

香取市古木戸遺跡・六部塚遺跡

－地方道路交付金委託(成田小見川鹿島港線)埋蔵文化財発掘調査報告書－

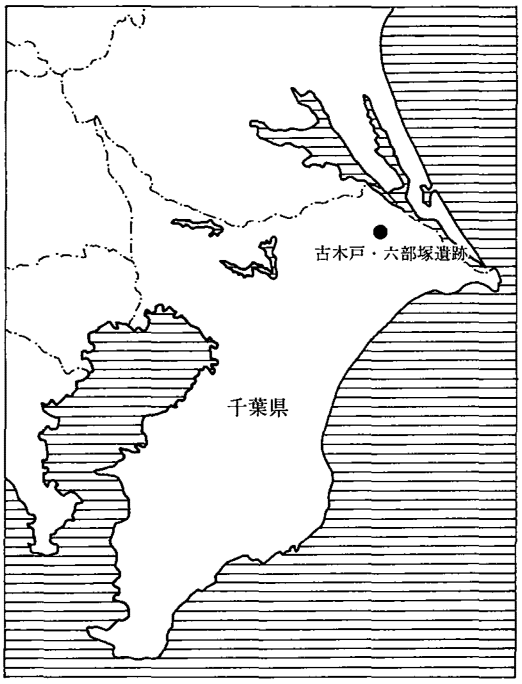
平成21年３月

千　葉　県　県　土　整　備　部

財団法人　千葉県教育振興財団

香取市古木戸遺跡・六部塚遺跡

－地方道路交付金委託（成田小見川鹿島港線）埋蔵文化財発掘調査報告書－



序　　文

財団法人千葉県教育振興財団(文化財センター)は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第625集として、千葉県県土整備部香取地域整備センターの地方道路交付金委託による成田小見川鹿島港線歩道工事に伴って実施した香取市古木戸遺跡・六部塚遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、近世の油田牧に関係する遺構などが検出され、この地域の歴史を知るうえで多くの貴重な成果が得られています。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際しご指導、ご協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また発掘から整理までご苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成21年３月

財団法人　千葉県教育振興財団
理事長　福　島　　義　弘

凡　　例

1　本書は，地方道路交付金委託に伴う県道成田小見川鹿島港線の埋蔵文化財調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡と所在地は以下の通りである。

古木戸遺跡（遺跡コード236-001）香取市油田字古木戸444-5ほか

六部塚遺跡（遺跡コード236-002）香取市油田字今宮1202-1ほか

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は，千葉県県土整備部香取地域整備センターの委託を受けて財団法人千葉県教育振興財団文化財センターが実施した。

4　発掘調査および整理作業の担当者および実施期間は以下の通りである。

平成19年度　北部調査事務所長　豊田佳伸

（発掘）　調 査 期 間　平成19年11月１日～平成19年11月30日

調 査 内 容　上下層確認調査・上層本調査

調査担当者　上席研究員　鈴木弘幸

平成20年度　北部調査事務所長　豊田佳伸

（発掘）　調 査 期 間　平成20年10月１日～平成20年10月31日

調 査 内 容　古木戸遺跡(2)：上層本調査・下層確認調査（10月１日～24日）

六 部 塚 遺 跡：上層本調査・下層確認調査（10月27日～31日）

調査担当者　上席研究員　土屋潤一郎

（整理）　整 理 期 間　平成21年１月５日～２月27日

整 理 内 容　記録整理から報告書刊行まで

整理担当者　研 究 員　黒沢　崇

5　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育庁教育振興部文化財課，香取市教育委員会，千葉県県土整備部香取地域整備センター，柿沼利治氏，吉田 敬氏にご指導，ご協力を得た。

6　本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第１図　小見川町役場作成　1：2,500　「小見川15」　昭和46年

第３図　国土地理院発行　1：50,000地形図「潮来」「八日市場」「佐原」「成田」（N1-54-19-1･5･6･9･10）

7　周辺地形航空写真は京葉測量株式会社による平成20年１月６日撮影のものを使用した。

8　本書で使用した座標値は世界測地系にもとづく平面直角座標で，図面の方位はすべて座標北である。

本　文　目　次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査の概要……1
　　1　事業の経緯と経過……1
　　2　調査の方法……1
　第２節　遺跡の位置と油田牧……3
第２章　古木戸遺跡……6
　第１節　概　要……6
　第２節　遺構と遺物……6
第３章　六部塚遺跡……11
　第１節　概　要……11
　第２節　遺構と遺物……11
第４章　まとめ……13

報告書抄録……巻末

挿　図　目　次

第１図　周辺地形図と調査区……2
第２図　千葉県内の近世牧位置図……4
第３図　油田牧位置図と周辺遺跡……5
第４図　下層確認グリッド･上層遺構分布図，SH-001……7
第５図　上層遺構分布図・断面図……8
第６図　SA-001・SX-001……9
第７図　出土遺物……10
第８図　下層確認グリッド・上層遺構分布図，出土遺物……12
第９図　油田牧と古木戸・六部塚遺跡調査区……14
第10図　水戸土浦道中絵図……14

図　版　目　次

図版１　航空写真
図版２　古木戸遺跡　遺構１
図版３　古木戸遺跡　遺構２
図版４　古木戸遺跡　遺構３
図版５　古木戸遺跡　遺物１
図版６　古木戸遺跡　遺物２
図版７　六部塚遺跡　遺構・遺物

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　事業の経緯と経過

県道成田小見川鹿島港線は，成田市寺台から旧小見川町を経て，神栖市筒井へ向かう主要地方道である。成田空港と鹿島港を連携する重要な機能を担う道路であり，今後の成田空港平行滑走路の北伸や鹿島港北公共埠頭の開発に伴い交通需要は急速に増加している状況にある。しかし，現在の路線は道路幅が狭く，屈折する箇所が多いため大型車両の通行に支障をきたすとともに，通学道路の安全性にも問題が生じてきている。そこで，歩道の確保，安全面の強化などを目的に，地方道路交付金委託において本路線の道路整備を行うことが計画された。この道路整備の実施にあたり，平成19年５月15日付香整第102号で千葉県香取地域整備センターより「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では現地踏査結果を踏まえ，平成19年６月19日付教文第17号８で事業計画地内には野馬土手・野馬堀・包蔵地(古木戸遺跡・六部塚遺跡)が所在する旨の回答を行った。そしてこの回答を受け，その取り扱いについて関係機関による協議を重ねた結果，事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり，財団法人千葉県教育振興財団文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

２　調査の方法　(第１図)

発掘調査　調査にあたり，調査区全体を覆うように世界測地系(座標系Ⅸ)のX＝－17,720，Y＝63,780を起点に20m×20mの方眼網を設定し，大グリッドとした。名称は起点から南方向に1，2･･･,東方向にA，B･･･とした。大グリッドを２m四方に100分割し，北西隅を00，南東隅を99として小グリッドとした。グリッドの呼称は数字とアルファベットと組み合わせ11D-86というように表記し，現地調査の記録類から遺物の注記にあたっても踏襲した。平成19年度の調査では，上層確認調査を調査対象面積の10%を目安に，任意にトレンチを設定して行った。確認調査の結果，調査地全域に溝状に土坑列が延びており，撹乱部以外を本調査範囲とした。平成20年度は平成19年度の成果を受け，当初より調査区ほぼ全面を表土除去し，発掘調査を行った。確認・本調査のための表土除去は重機を使用した。遺構の種類によって竪穴住居跡はSI(整理時にSH:ピット群に変更)，土坑はSK，溝はSD，野馬土手(堀含む)はSA，竪穴状遺構はSXと記号を付し，遺構種類毎に通し番号を付けて遺構番号とした。遺物は遺構毎に通し番号を付け，所属遺構が不明確な遺物についてはグリッド単位で取り上げた。

上層の調査後に調査対象面積の２%に対し下層の確認調査を行った。両遺跡共に旧石器は出土せず，確認調査で終了した。それぞれの遺跡の調査対象・確認・本調査面積は各章の第１節概要において記載した。

整理作業　整理作業は水洗注記を行った後，遺構毎に遺物を種別分類してから，接合作業等を実施した。報告書作成にあたり，原則として発掘調査において付けた遺構番号をそのまま使用したが，整理の進捗に伴い，調査時竪穴住居跡としたSI-001についてのみピット群と捉え直し，SH-001として報告した。なお，原図の図面類は発掘時の遺構番号のままである。

第１図　周辺地形図と調査区

第２節　遺跡の位置と油田牧[1)]（第２・３図）

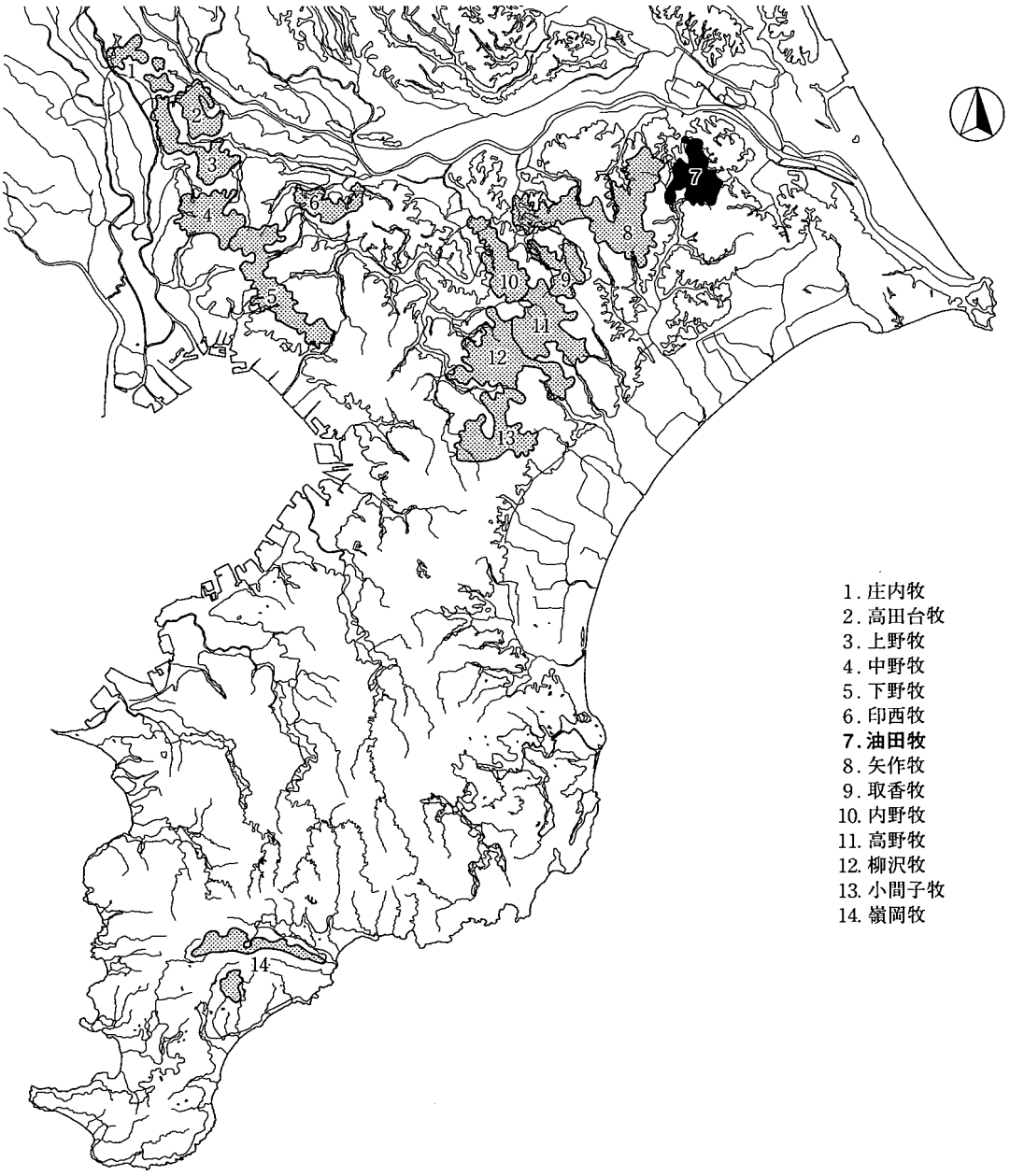
古木戸遺跡・六部塚遺跡は利根川に注ぐ黒部川の支流である清水川の上流域，香取市南部に広がる標高約41mの台地上に立地する。調査対象区は台地を東西に横断する県道成田小見川鹿島港線沿いの平均幅5m，長さ約360mの南側拡幅工事部分である。六部塚遺跡には県道北側にもわずかに拡幅工事が及ぶ部分があるが，当センター発掘時(平成20年度)に文化財課立ち会いのもと２か所の試掘が行われ，遺構の広がり・遺物の出土がみられず慎重工事という取扱いとなった。調査地の地目は山林で，台地南側下の水田面までの比高差は約22mである。なお，古木戸遺跡南端で確認された野馬土手に伴う溝はそのまま南の台地下へと続いていく。

古木戸遺跡で検出された野馬土手は近世油田牧に伴うものであり，周辺の遺跡については油田牧を中心に説明を行うことにする。

千葉県内の江戸幕府直轄の牧として小金牧・佐倉牧・嶺岡牧が所在していた。油田牧は佐倉牧の中で最も東に位置し，最も規模が小さい牧である。油田牧の範囲は，旧佐原市，旧栗源町，旧小見川町に及ぶが，面積では旧佐原市が多くを占める。1804(文化元)年『佐倉七牧大絵図』では，牧が野付村(下小野村･織幡村･油田村・高萩村・岩部村・助沢村・伊地山村・福田村・本矢作村・大根村・返田村)に囲まれた様子が描かれ，牧士根本鉄之助の「手控帳」には，牧は縦1,860間，横平均561間，周囲の歩数1,044,900歩と記されている。1838(天保９)年の『下総国香取郡野付九か村絵図』には野付村それぞれに木戸があるとされており，木戸には木戸番が寝泊まりし，野馬の番にあたったという。このことからも，油田村における木戸は小字に残っているように今回の調査区周辺にあたることは間違いないであろう。なお，明治維新後、新政府の牧の畑作農村化により，油田牧は９番目の開拓地となり，九美上(くみあげ)が正式の村名になった。

油田牧西端にある捕込の北東に位置する野馬土手は，ソウナ遺跡(第３図-16)として1982年に発掘調査が行われた。野馬土手の位置が絵図にみられる牧範囲とほぼ重なるため，油田牧西側外縁の野馬土手と判断されている。調査では全長120mが確認された。土手は，二重土手で，土手の間に堀がみられる。牧外側の土手が高さ0.8～1.2m，内側の土手は0.4～0.6mとなり，古木戸遺跡でみられた状況と共通する。油田牧東側下小野地区の台地縁辺でも二重土手(高0.7～1.5m・幅3.0m，高0.5～1.0m，幅2.0m)が約1,800m確認されており，油田牧の中で極めて遺存状況が良好である。1985年には大栄栗源干潟線の建設に伴って油田牧の南に位置する野馬土手(第３図-14)の発掘調査が行われた。野馬土手は南北に延び，調査区内でＹ字状に北と北東方向に枝分かれする。野馬土手の規模は幅3.7m，高さ1.6mで，ローム粒子を主体とする黄褐色土と黒色土を互層にして比較的丁寧に積み上げられていた。堀の断面形はＵ字状で，深さは1.1m，堀側の傾斜が急であった。この地点の北西200mに位置する助沢遺跡では，遺物は出土せず時代は確定できないが，古木戸遺跡・六部塚遺跡で検出された土坑を伴う溝と同様の遺構が検出されている。また，香取市九美上字駒込22番５に所在する油田牧捕込跡(第３図-15)は「佐倉油田牧の野間込跡」として1993年2月28日に千葉県指定史跡に指定された。指定面積は4,016㎡，遺存状況は良好で測量調査のみが行われている。南から入る小さな谷津先端部に約３mの土手が３つの部分を取り囲むように築成され，内部が捕込場・分込場・溜込場に分かれている。

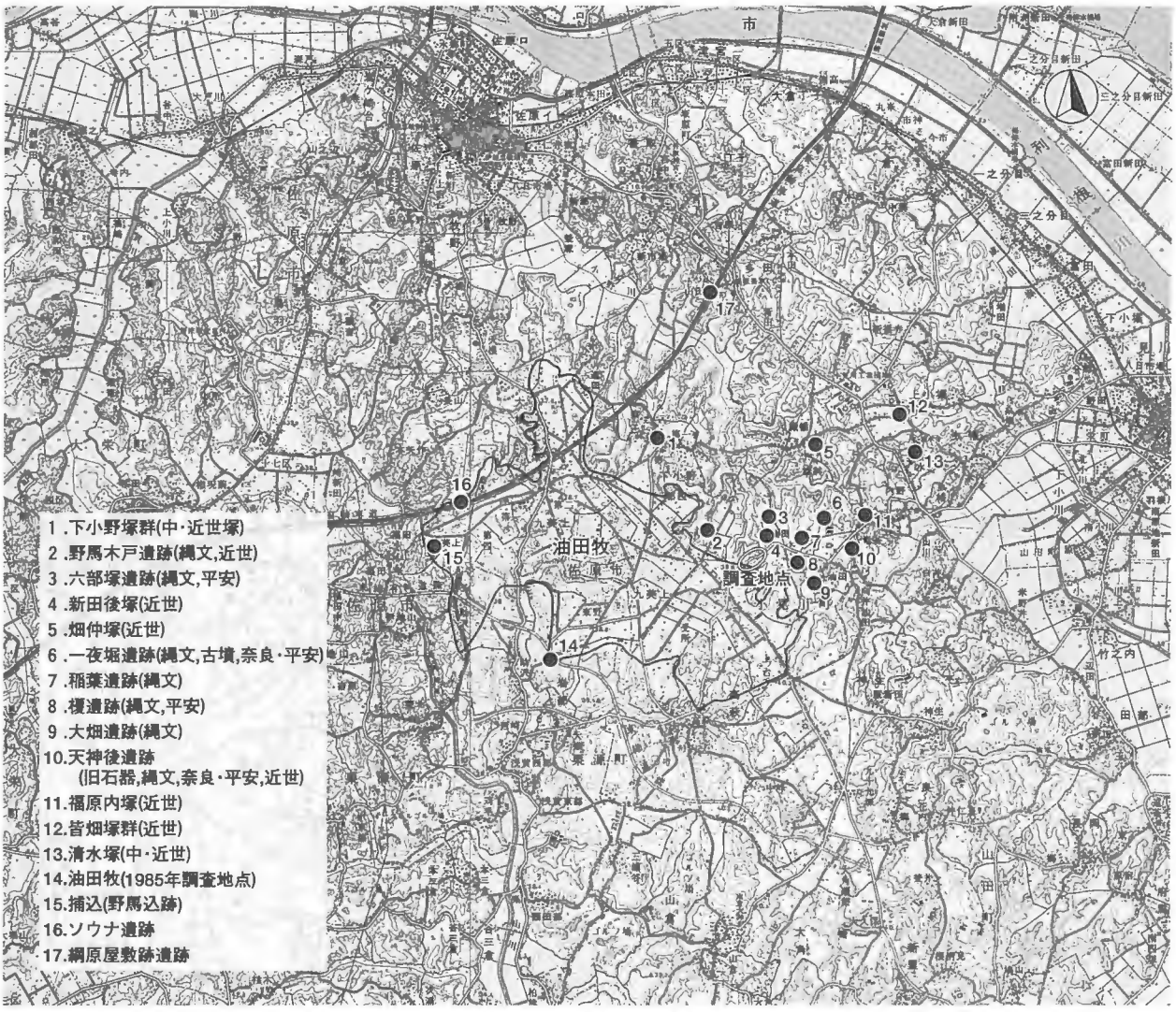
1986年『千葉県生産遺跡分布調査報告書』では油田牧の野馬土手15か所(総延長6,016m)の現存が確認され，2006年『県内遺跡詳細分布調査報告書』では絵図やこれらの発掘調査成果を総合的に判断し，牧の範囲を東西5.5km，南北4.8km，外周24.0km，面積11.7km²に及ぶと推定した。



第２図　千葉県内の近世牧位置図（S=1/750,000）

一方，油田牧の北側では1982・83年度に東関東自動車道建設に伴って，網原屋敷跡遺跡（第３図-17）において捕込遺構の発掘調査が行われた。『香取文書』に記されている中世の「葛原牧」に付属する遺構と想定され，土手で仕切られた区画や水飲み場と考えられる粘土敷土坑が調査された。遺物は16世紀代のカワラケ，擂鉢，内耳土器等が出土した。

第３図には他に油田牧の東側台地上，古木戸遺跡・六部塚遺跡の立地する台地周辺で関連する遺跡を示した。周辺には縄文時代集落とされる遺跡と近世の塚群が多く確認されている。しかし，発掘調査の行われた遺跡は少なく，今回の調査は出土遺物が少ないものの，当地域において貴重な発掘成果を加えたことになる。



第３図　油田牧位置図と周辺遺跡（S=1/100,000）

注1　油田牧・周辺遺跡の内容については下記文献を参考にした。

1966　『佐原市史』「近世の牧畜と油田・矢作牧」　佐原市

1986　『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告』「牧」　千葉県教育委員会

1988　『房総の牧』第４号　房総の牧研究会

1988　『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ（佐原地区１）』「ソウナ遺跡・鳥ヶ丘第３遺跡」　財団法人千葉県文化財センター

1990　『大栄栗源干潟線埋蔵文化財調査報告書』「油田牧跡」「助沢遺跡」　財団法人千葉県文化財センター

1991　『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅵ（佐原地区３）』「網原屋敷跡遺跡」　財団法人千葉県文化財センター

1993　『千葉県の指定文化財 第３集－平成４年度－』「佐倉油田牧の野馬込跡」　千葉県教育委員会

1998　『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)－香取・海上・匝瑳・山武地区(改訂版)』　千葉県教育委員会

2006　『県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧跡』　財団法人千葉県教育振興財団

第２章　古木戸遺跡

第１節　概　要（第４・５図）

発掘調査は平成19年度と20年度に行われた。内容と調査面積は以下のとおりである。

平成19年度	内	容	確認調査	上層	146㎡／1,457㎡	下層	32㎡／1,457㎡
			本 調 査	上層	656㎡	下層	0㎡
平成20年度	内	容	確認調査	上層	515㎡／515㎡	下層	12㎡／515㎡
			本 調 査	上層	515㎡	下層	0㎡

確認調査は平成19年度には対象面積の10％に対し行い，トレンチの位置は第５図のとおりである。７H・９E・10C・10Dグリッド付近で現代において深く掘削が行われた後，廃棄物が埋められており（図版２），その部分を本調査範囲から除外した。平成20年度調査では古木戸遺跡(2)として，前年度の成果に基づき，当初からほぼ調査区全面を表土除去し，本調査を行った。検出された遺構は焼土とセットに確認されたピット群(SH-001)，調査区南西端に野馬土手(SA-001)と浅い掘り込み(SX-001)，現道に沿って延びる溝状の土坑列(SD-001～006)である。土坑列については本来ほぼ連続していたものと考えられる。主にSX-001に伴い中・近世遺物が出土したが，他の遺構からは確実に伴う遺物は出土していない。なお，上層本調査後に下層の確認調査を11か所に一辺２mのグリッドを設定して行ったが，出土遺物はなかった。

第２節　遺構と遺物

１　遺　構（第４～６図，図版２～４）

SH－001　6J-61グリッド周辺のピット群と焼土跡である。床面が硬化せず，ピット深さが20cm～40cmと一定しない。遺物は出土していない。

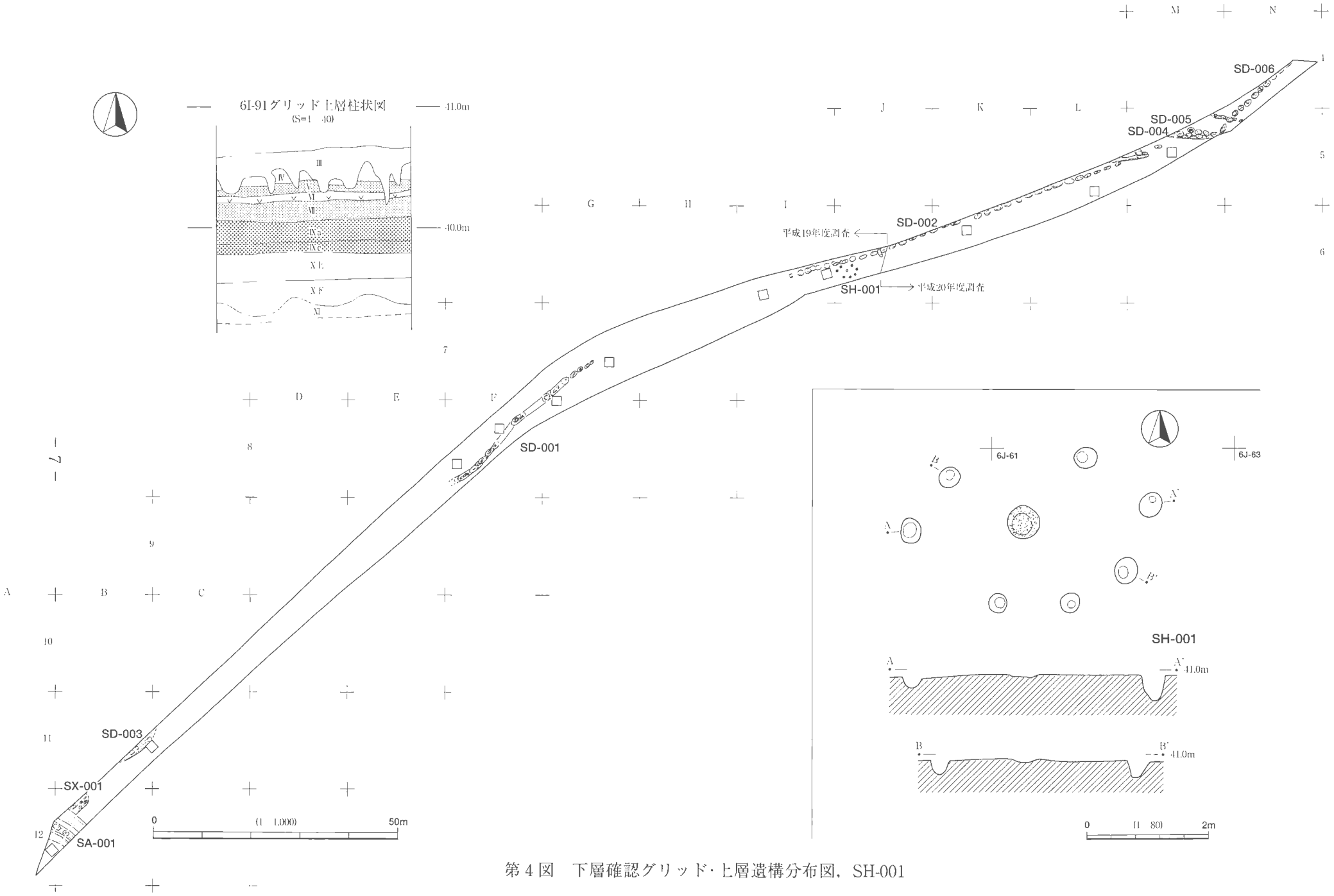
SA－001　12B-30グリッド周辺に位置する野馬土手である。現状では中心に堀があり，その両側に高さの異なる土手状の高まりを有する。測量後，調査を進めると土手部分も以前は溝状に掘り窪められていたことが判明した。数回の掘り直しによるものであろう。出土遺物は常滑甕破片(図版6-10) １点のみである。

SX－001　12B-23グリッド周辺のSA-001北側に隣接する深さ約25cmの竪穴状遺構である。野馬土手との新旧関係は断面図では明確ではない。野馬土手盛土直上の堆積土(第２層)がSX-001の覆土上位に堆積しており同時に機能していた時期があった可能性もあるが，先にSX-001が廃絶されている。ピットが不規則で深さも一定しないが，P1・P2はしっかりとした掘り込みである。遺物は比較的多く出土した。

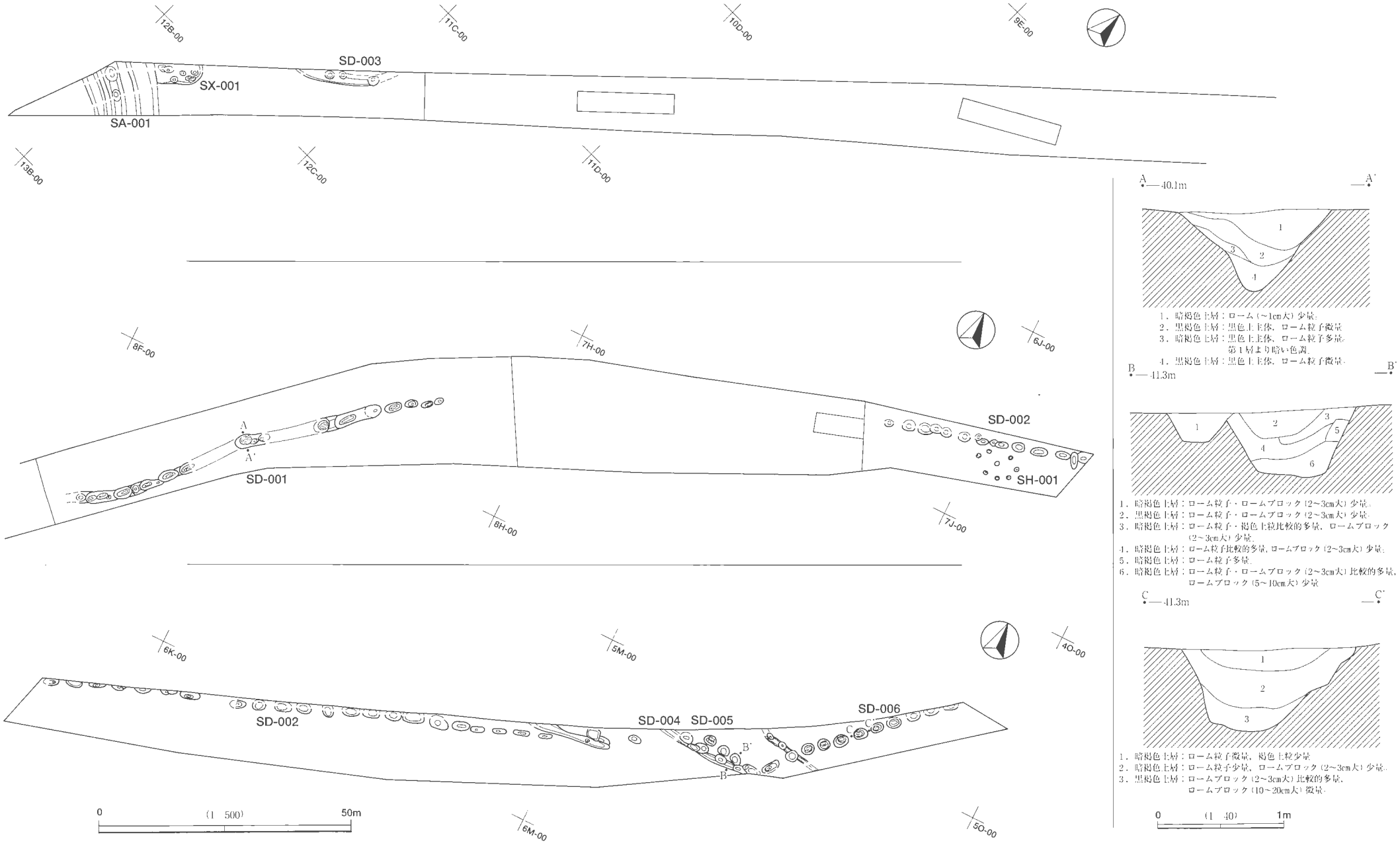
SD－001～006　ほぼ調査区全体にわたり，現道に沿って検出された一部溝状の掘り込みを伴う土坑列である。SD-004･005の南側では硬化面が確認でき，これらは現道とは別方向に延びる道に伴う可能性がある。土坑の形状は平均長軸1.0～1.5mの楕円形で深さは0.3～0.6mである。

２　遺　物（第７図，図版５・６）

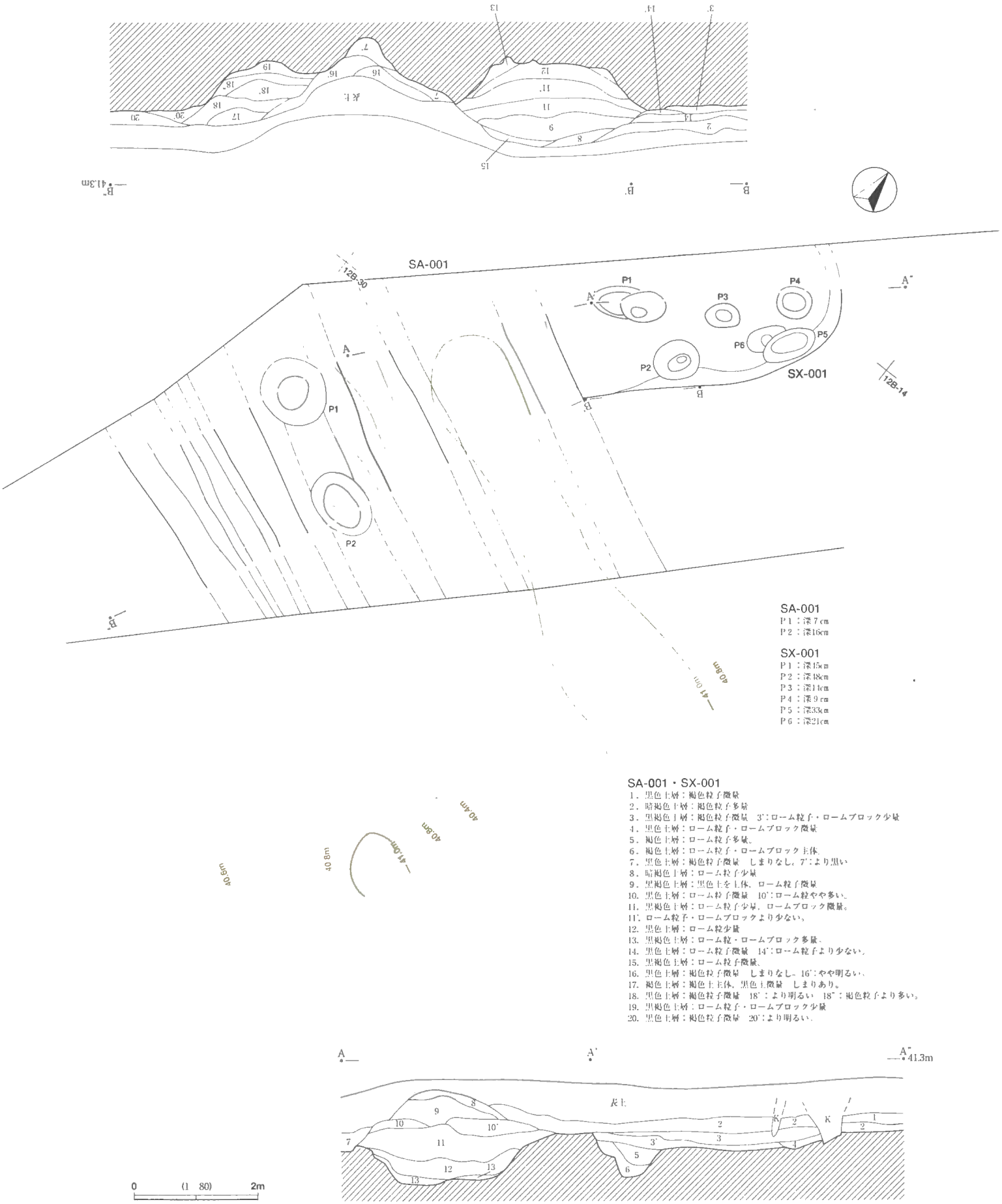
１・２は縄文時代早期田戸期の尖底土器で，胎土に繊維が含まれる。ミガキ状に縦方向に細かいケズリが施される。３は縄文時代中期土器破片で，胎土に砂礫・雲母が多量に含まれる。４は紐線文，５は無文の縄文時代後期土器破片である。６は弥生時代後期の土器破片で器壁は薄く，細かい縄文が施される。７・



第4図　下層確認グリッド・上層遺構分布図，SH-001

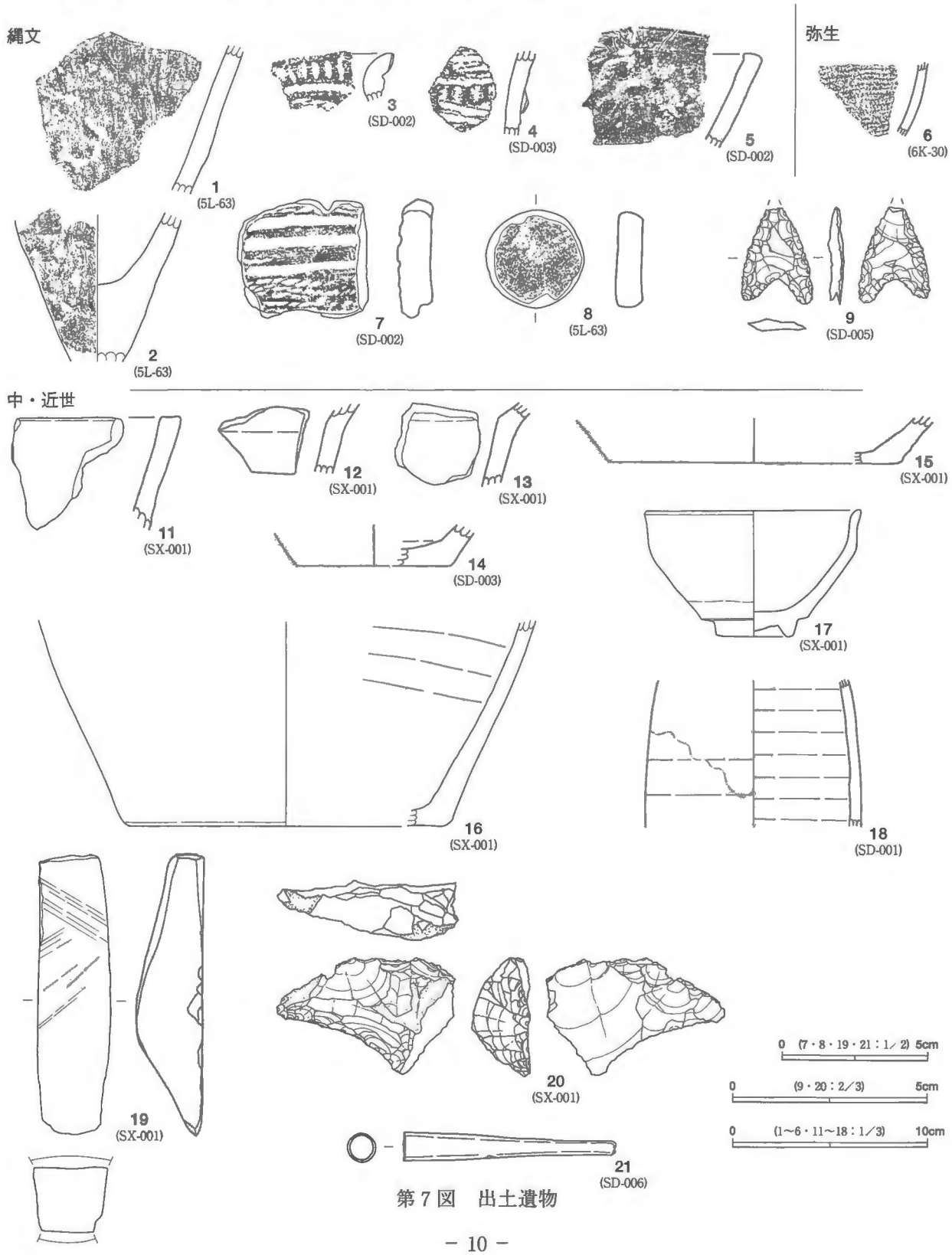


第５図　上層遺構分布図・断面図



第6図　SA-001・SX-001

8は縄文時代中期の土製品で，7は土器片錘(重量24.18ｇ)，8は無文の土製円盤(重量13.34ｇ)，9は安山岩製石鏃(重量1.53ｇ)である。10～22は中・近世遺物である。10は中世常滑窯甕破片(図版6-10)，11～16は在地土器で，11～13は中世の内耳鍋破片，14･16は中・近世の壺破片，15は近世の炮烙破片と考えられる。17は近世初頭の瀬戸美濃窯天目茶碗，18は近世の瀬戸美濃窯灰釉徳利破片である。19は凝灰岩製砥石(重量66.47ｇ)，20はメノウ製火打ち石(重量14.91ｇ)，21は銅製キセル吸口(重量3.82ｇ)である。22は鉄製品破片(図版6-22)で薄く，屈曲がみられるため鉄鍋と思われる。



第７図　出土遺物

第３章　六部塚遺跡

第１節　概　要（第８図）

六部塚遺跡の発掘調査は平成20年度に古木戸遺跡(2)と併せて行われた。古木戸遺跡(2)と同様に当初より調査区全面の表土除去をして調査を行った。内容及び面積は以下のとおりである。

内　容	確認調査	上層	165㎡／165㎡	下層	4㎡／165㎡
	本 調 査	上層	165㎡	下層	0㎡

検出された遺構は溝(SD-001・002)と馬歯の出土した土坑(SK-001)である。SD-002は古木戸遺跡で検出された溝状土坑列の延長上に現道に沿って位置しており，本来は同一の遺構と捉えても良いかもしれない。出土遺物は非常に少なく，実測可能な個体は３点であった。また，上層本調査後に下層の確認を１か所に一辺２mのグリッドを設定して行ったが，出土遺物はなかった。

第２節　遺構と遺物（第８図，図版７）

１　遺　構

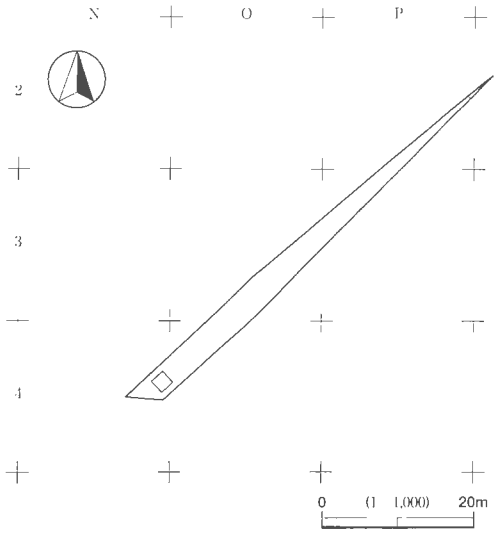
SD－001　4O-20グリッド周辺に位置する。規模は平均幅1.4m，深さ0.4mで，東西方向に延びる。SD-002より新しいことは平面的に確認することができた。遺物は１点も出土しなかった。底面は平らで，側壁の立ち上がりは南側の方が急である。

SD－002　4N-38～3O-57グリッド周辺に位置する。北側と南側とに分かれ，規模は平均幅1.5m，深さ0.3mで，現道に沿って北東－南西に延びる。部分的にピット状の掘り込みが伴うが，古木戸遺跡でみられた溝とは形状は異なる。しかし，方向・規模・覆土などの様相からは共通性がみられるため同一遺構の可能性が高い。遺物は７点の土器小破片が出土した。縄文時代後期の破片が主体であるが出土状況・覆土の様相からして遺構に直接伴うものではないであろう。

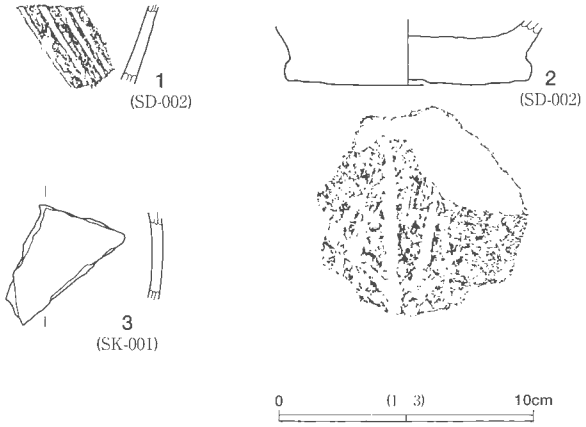
SK－001　4O-12グリッドに位置する。平面形は楕円形で長軸1.2m，短軸0.7m，深さ0.4mである。底面は平らで，側壁は比較的急に立ち上がる。SD-002より新しいと考えられる。覆土中位から下位にかけて馬歯(図版７)が出土した。土坑の規模から１体分と思われ，馬歯は大きく，歯の摩耗も進んでいる。馬歯と混じって鉄釉壺破片(第８図- ３)が出土した。他には縄文時代後期土器小破片が７点出土した。

２　遺　物

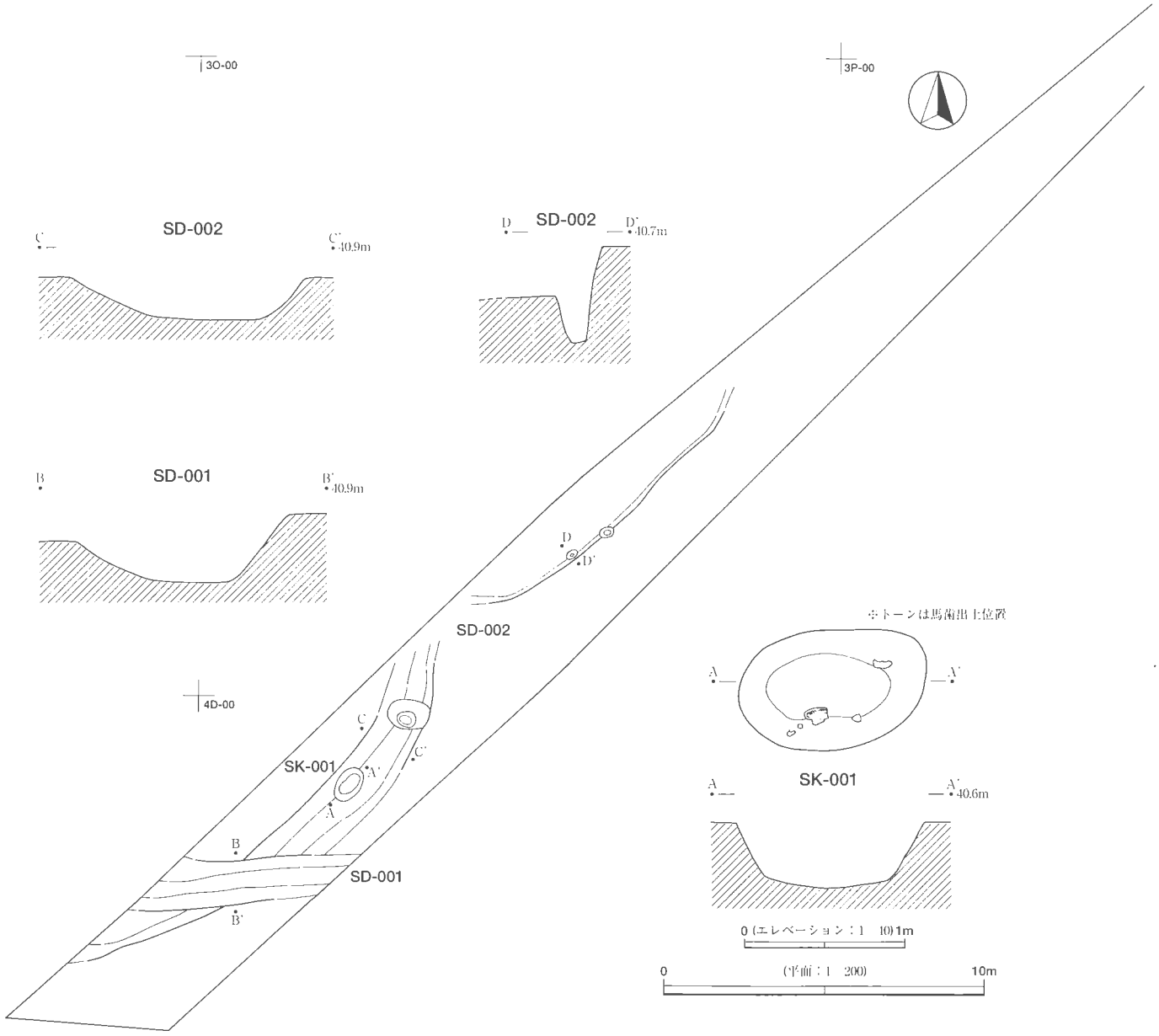
１・２は，縄文時代後期と考えられる土器破片である。１は器壁が薄く，外面に条痕，内面は丁寧にミガキが施される。２は分厚い底部破片で，底面には木葉痕がみられる。内面は被熱により摩滅が著しく，外面は雑なヘラケズリが施される。1・2ともに胎土に繊維はなく，白色微砂粒が含まれる。３は，SK-001出土の鉄釉壺の肩部付近と考えられる陶器破片である。産地は不明であるが，近世後期の所産であろう。



下層グリッド位置図



出土遺物



第８図　下層確認グリッド・上層遺構分布図，出土遺物

第4章　まとめ

今回は歩道整備による道路拡幅という狭い調査範囲であったが，近世油田牧の関連遺構を2遺跡にわたって検出し，当時の牧周辺の景観復元をする上で貴重な成果を上げることができた。古木戸遺跡では，遺跡名称が示す牧の木戸に関連すると考えられる竪穴状遺構(SX-001)が野馬土手に隣接して検出された。野馬土手との新旧関係は判然としないが，同時に機能していた時期があった可能性がある。ピットの配列は不規則だが，しっかりとした掘り込みもあり，木戸番に関係する竪穴系建物の想定ができる。遺構は完掘できなかったが，比較的まとまって遺物が出土し，年代根拠の乏しい野馬土手調査において貴重な資料といえる。出土遺物[1]は中・近世の在地土器と瀬戸美濃窯陶器である。特に天目茶碗は遺存が良好で，特徴から瀬戸美濃窯の大窯4段階末～登窯第1小期段階の資料と捉えられ，年代は17世紀初頭を与えうる。これらの示す年代は，野馬土手と竪穴状遺構の時期的関連を示す上でも重要である。野馬土手自体は調査の結果，3条の堀(北堀・中央堀・南堀)が検出された。位置的には北堀・南堀は土手の直下に掘られていた。最終形態は中央に1条の堀をもつ2条土手である。想定としては，

①当初は最終段階の堀(中央堀)部分に土手が築成され，両脇に堀(北堀・南堀)が掘られた。

②それぞれの堀の北側(牧外側)に土手が築成された。

③北堀に対応する土手は南側(牧側)に築成され，その痕跡が南堀の覆土(盛土)とする。

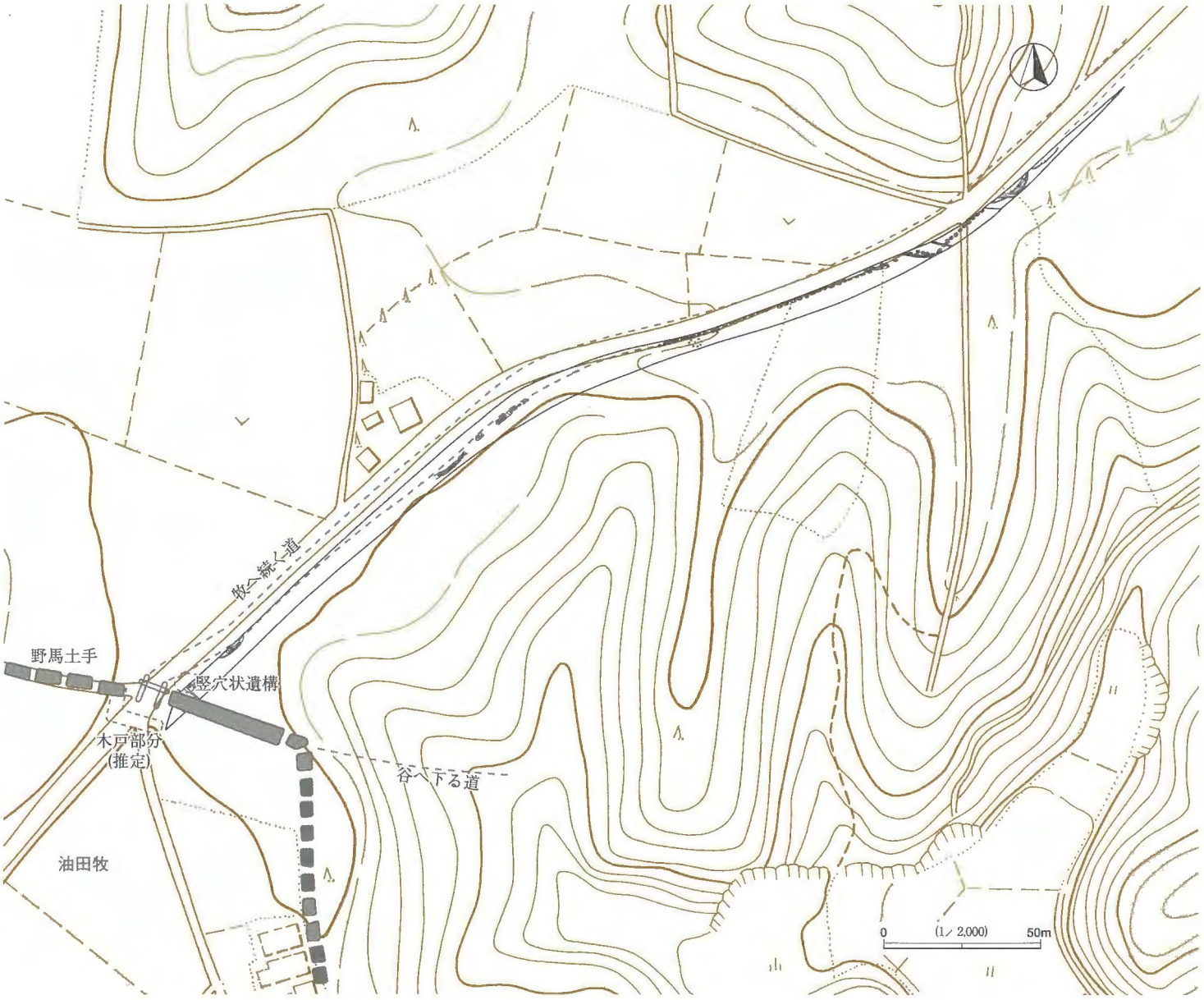
と，大きく3通り考えられる。①とすれば計2回，②・③とすれば計3回の掘り直し，作り直しが行われたことになる。しかし，実際調査を行えたのは，2m幅程度で検出された堀が牧東側全体に巡っているとするにはやや複雑な様相であり，別地点の野馬土手調査の成果からも木戸部における土手の屈曲に伴う溝を想定するべきかもしれない。

また，野馬土手に直交し，現道(成田小見川鹿島港線)にほぼ沿った方向で一列に連なる土坑列が2遺跡にわたって検出された。それぞれの土坑の覆土を見る限り，柱を立てた痕跡や人為的に埋め固めた様子はみられないことから，牧の木戸部に続く道に沿って植えられた樹木の植栽痕と捉えたい。今回の調査区では確認できなかったが，木戸部が恐らく調査区北側に存在し，現道自体が油田牧の東側に入る当時の道であった可能性は高い。一方，六部塚遺跡では現道に沿う土坑列に混じって遺存の良い馬歯の出土した土坑(SK-001)が検出された。出土状況・土坑の規模からみて馬を埋葬した穴の可能性が高く，牧との関係が濃厚である。以上の発掘調査成果から，牧が機能していた当時の景観復元に『水戸土浦道中絵図』(第10図)を参考にすると，絵図の木戸部に至る道に沿った樹木の跡に土坑列(SD)，木戸番が在中していたと思われる木戸部野馬土手に隣接した建物跡に竪穴状遺構(SX)が対応すると考えられる。

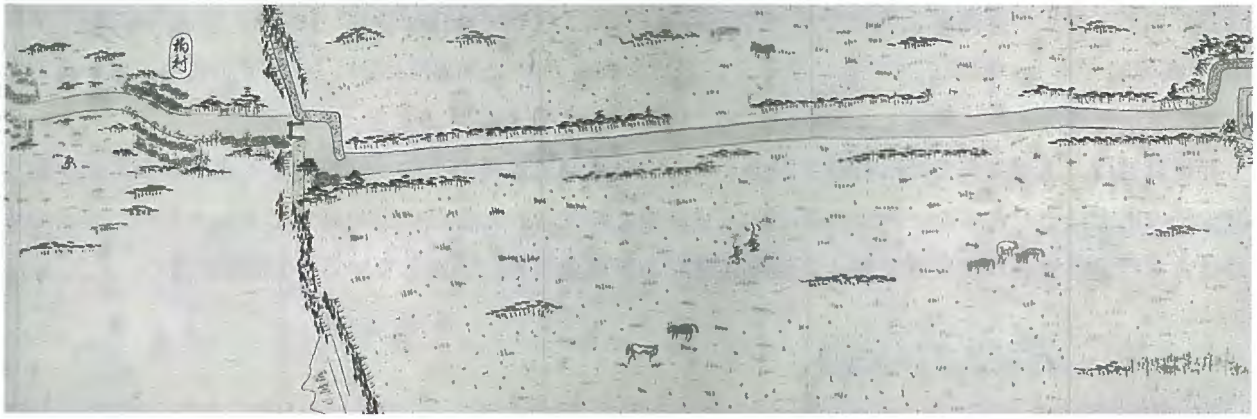
近世以外は，下層調査では旧石器は出土せず，上層遺物では縄文土器・弥生土器・土師器ともに小破片で少量の出土にとどまった。今回の調査区は遺跡の立地する台地縁辺に近い部分であったため，集落の中心は古木戸遺跡であれば現道北側，六部塚遺跡であれば北東側に展開している[2]可能性が高い。

注1　当財団 上席研究員 井上哲朗氏教示。

2　香取郡市文化財センターによって今回調査地北東側の調査が行われ，縄文時代早期～前期，平安時代の集落・遺物が多く確認されている。2006『六部塚遺跡』 財団法人香取郡市文化財センター調査報告第101集



第９図　油田牧と古木戸・六部塚遺跡調査区



第10図　水戸土浦道中絵図（柿沼利治氏所蔵）

図版１　航空写真（S＝1/10,000）

図版２　古木戸遺跡 遺構１

6I-91 グリッド下層断面

確認トレンチ（東から）

SH-001（西から）

SH-001 焼土跡（西から）

SA-001（西から）

図版３　古木戸遺跡 遺構２

SA-001 調査前（北東から）

SA-001（北西から）

SA-001・SX-001（北東から）

SX-001 遺物出土（南東から）

SD-001（東から）

SD-001（北東から）

図版４　古木戸遺跡 遺構３

SD-002（東から）

SD-002（南西から）

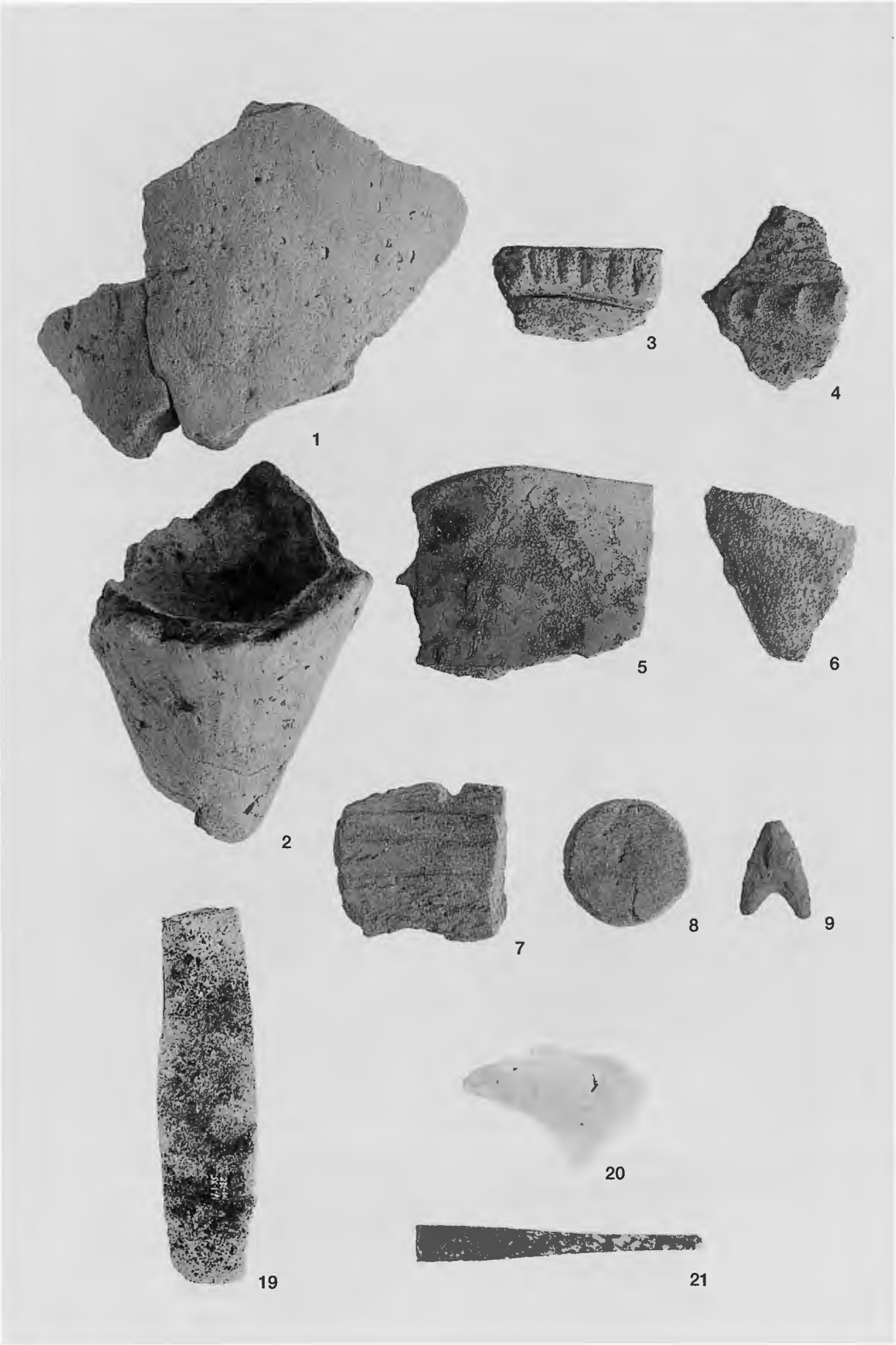
SD-003（北東から）

SD-003（南東から）

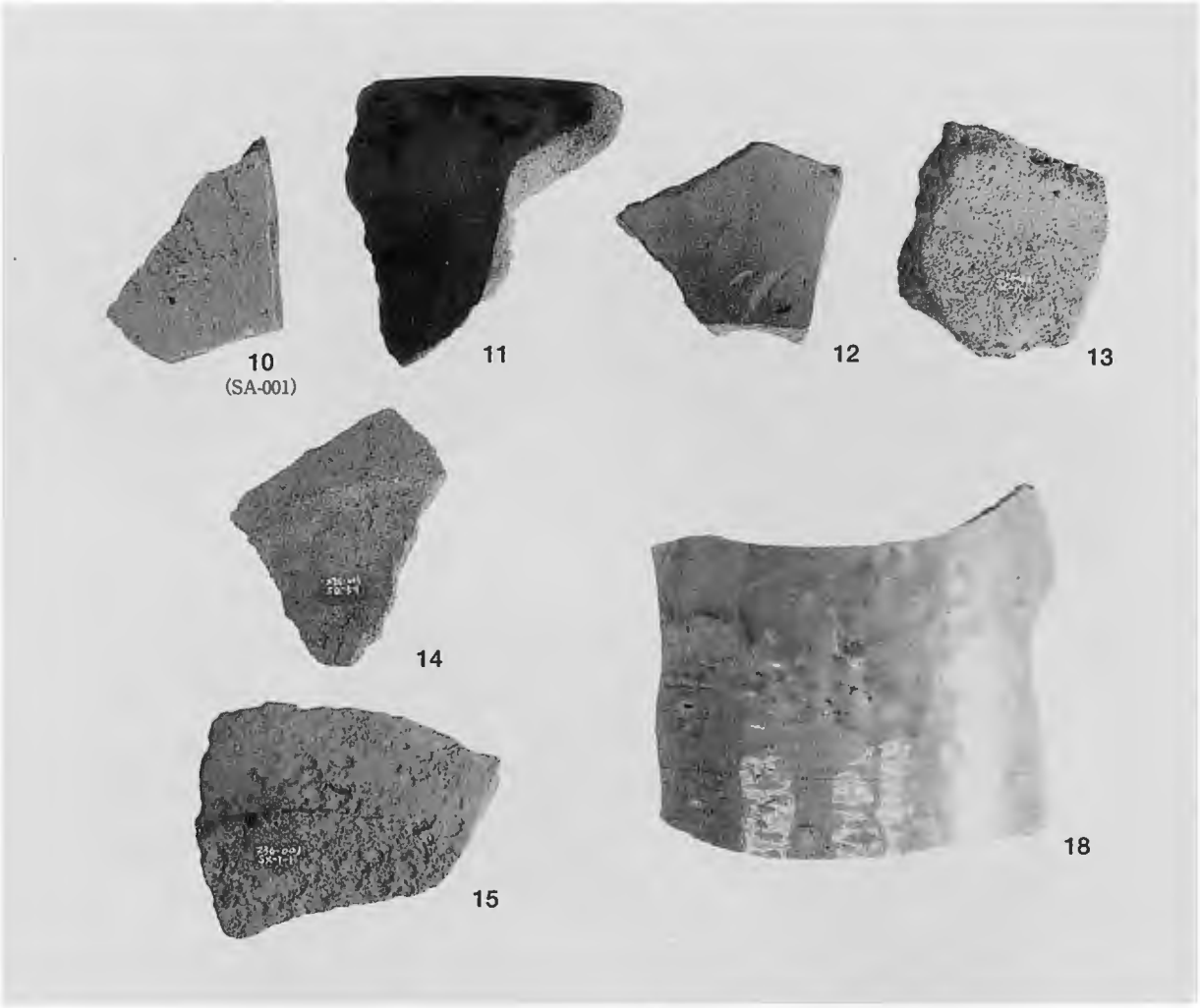
SD-004・005（南東から）

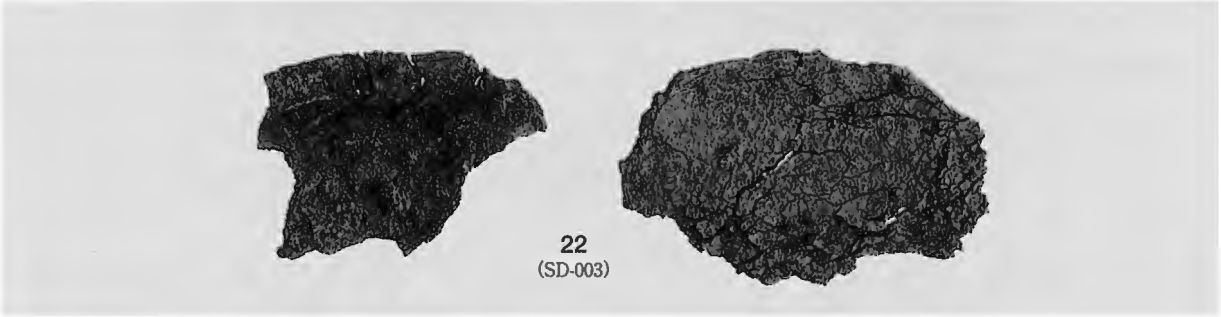
SD-006（南から）

図版5 古木戸遺跡 遺物1



図版６　古木戸遺跡 遺物２

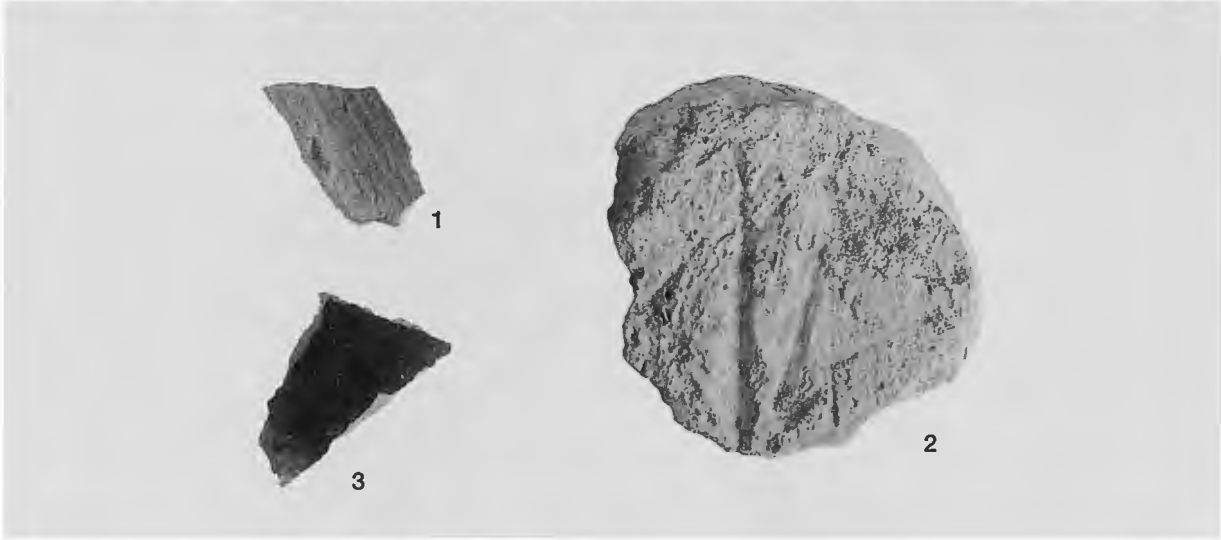


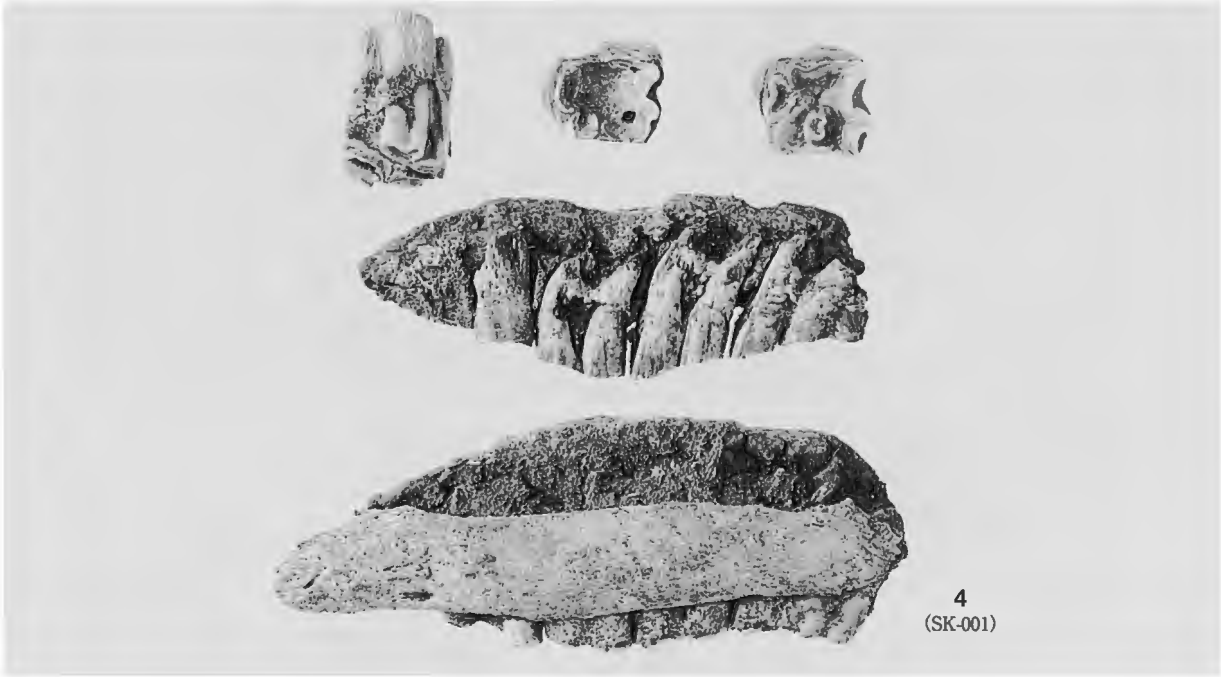


図版７　六部塚遺跡 遺構・遺物

SD-001・002（南東から）

SK-001 馬歯出土（南西から）





報告書抄録

ふりがな	かとりしふるきどいせき・ろくぶづかいせき
書名	香取市古木戸遺跡・六部塚遺跡
副書名	地方道路交付金委託(成田小見川鹿島港線)埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第625集
編著者名	黒沢　崇
編集機関	財団法人　千葉県教育振興財団
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809-2　　TEL043-424-4848
発行年月日	西暦2009年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間	調査面積㎡	調査原因
ふるきどいせき 古木戸遺跡	かとりしあぶらだあざふるきど 香取市油田字古木戸 444-5ほか	12236	001	35度 50分 13秒	140度 32分 26秒	20071101～ 20071130 20081001～ 20081024	1,972	県道成田小見川鹿島港線歩道工事に伴う事前調査
ろくぶづかいせき 六部塚遺跡	かとりしあぶらだあざいまみや 香取市油田字今宮 1202-1ほか	12236	002	35度 50分 15秒	140度 32分 33秒	20081027～ 20081031	165	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古木戸遺跡	野馬土手 包蔵地	縄文時代 中・近世	ピット群 野馬土手 竪穴状遺構 土坑列	縄文土器・石器・土製品 陶磁器・石製品・キセル	油田牧東部の木戸部周辺の遺構群が検出され，土坑からは馬歯が出土した。
六部塚遺跡	包蔵地	中・近世	土坑列	縄文土器 陶磁器・馬歯	

要約	狭い調査区であったが，近世油田牧に関連すると考えられる遺構が検出された。古木戸遺跡では，遺跡名称が示すとおり牧の木戸部周辺と想定される野馬土手と竪穴状遺構が検出され，竪穴状遺構からは遺存の良好な陶磁器が出土した。また，野馬土手に直交する方向で一列に連なる土坑列が2遺跡にわたって検出され，牧東部の木戸へ続く道に沿った樹木の植栽痕と考えられる。一方，六部塚遺跡では馬歯の出土した土坑が検出され，牧との有機的な関係が想定される。

千葉県教育振興財団調査報告第625集

香取市古木戸遺跡・六部塚遺跡

－地方道路交付金委託(成田小見川鹿島港線)埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成21年3月25日発行

編　集　財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　行　千葉県県土整備部
千葉市中央区市場町1-1

財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印　刷　印刷会社　ライフ
成田市東和田595